

# 小田原史談

第89号

発行所 小田原史談会  
小田原市西栢山3310

ごあいさつ  
会長 中野 敬次郎

私たち小田原史談も創立以来、本年で二十三周年になります。人間の一生でいえば、ようやく成人の域に達したことになりますので、今後は史談会の面目を十分發揮できるような、体制と行動を確立しなければならぬ時期にはいったと思えますが、この重大期に会長に推せんを受けましたことには、ひどく責任を感じている次第です。私に前市長故鈴木十郎氏が会長でいられたとき、永くその下で副会長をやり、その後には会長もやった経験がありますので、役員、会員の方々とはお顔なじみであり、気心も通じていると思えますのでこれを頼みとして、自らを打ち込んで責任を果して行く決心しております。

何と言っても、会員皆様の和親協力が第一です。よりよい事業をして行くことが第二です。そして、史談会の名の通り、何んでもよいから歴史的研究をされるのが大切で、宗は教えるのです。智(ち)と会(え)という言葉に智(ち)と会(え)ということがあります。人と人とが集る何々会(かい)というのも、この会(え)の精神から起きてくるのです。

差別ないこと、物事にたらわれないことを言うのです。史談会もこういう人々の集りだけで物を書いたり頭の中だけで物を書いたり批判したりすることはやさない。しかし、それは本当の智(ち)であろうか。身を治め、行をやり、真実を極めるところに智があると禅宗は教えるのです。智(ち)があつて会(え)がないのもだめ。会(え)があつて智(ち)がないのもだめ。要は二つの一致です。

會員皆様の協力によつて、今までと同様に史談会としての史談会を続けて行きたいと思ひます。

## 曾我岸地蔵堂

西山 銈太郎

はじめに

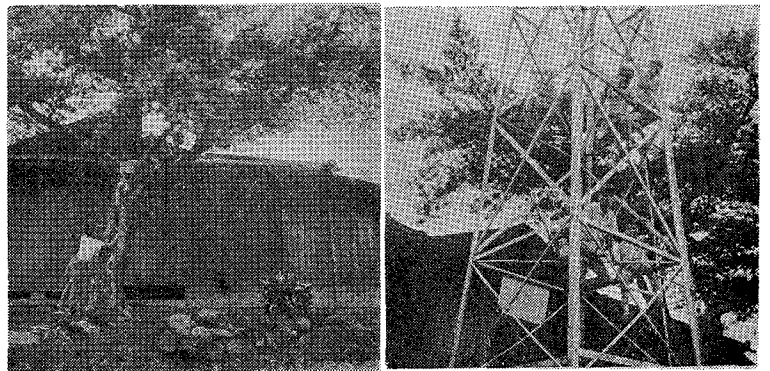
曾我岸部落の略々中央に何時の頃からか地蔵堂があった。堂の前には年古りた槇の木が、東側には防火用の池があり、堂内には地蔵尊

一、村の中心地蔵堂

地蔵堂は単に「堂」と呼ばれて「村」(明治二十二年以前は曾我岸村だったから、部落の事を今でも村と云う場合が多い)のあらゆる行事と子供の遊びの中心だった。住む人もなく、部屋はたゞみもなく土足で入り荒れるに任されたが、何かあると備付のまこもの敷物を使った。年一の村の「初寄せ」も田植の終わった農休みや二十日の無事の「おみき」もこゝで行はれた。青年の土用干しやお祭りの「ざんばらい」も行はれ、堂の西側のおろしに入つた消防器具の手入れも行はれた。堂こそは文字通り「岸の村」の中心だった。尚電灯は消防小屋前で堂の左手前庇に、外灯が一箇あるだけだったので、それ等の行事は総て陽のある中だけの事だった。

私は子供の頃祖父から「毎朝暗い中からお経の音がするので感心だと思つた。或冬の寒い朝ソツと覗いたら、布団の中から手を出して木魚を叩いてやがつたので、この驚つたれ坊主め」といふ話を何回か聞かされた。随つて、更には建物の構造から見ても、無任だつた事許りではないらしい。

私共が子供の頃(大正年代)は、夏は毎日何回となく此の池で泳ぎ、尺余の何十匹もの鯉をすくつた。槇の木は枝が四方に拡がり、夫々に飛行機だとか、二階だとか、或はぶらんこ等と名付けて登り、それ等の枝を大きくゆすぶつた。大正十三年、四年頃には堂の前の木の火の見が、当時としては珍らしい鉄塔になった



(これは戦争中撤去され、一時、再び木造になった)それからはそのはしごだけでなく、塔の中や外を、鉄材につかまつて頂上の展望台迄上り下りして大人のきもを冷させた。室内では一年中時雨の区別なく遊び、天井板には田の土のだんごを投げつけた祭だんに上つて、閻魔大王の肩に乗り天井裏へ上つたり、大王の首を抜いて、二つに割れた前面を顔にあて不意に人前に出て「オッカナイゾー」と等と云はれた少年も、遊びに夢中で六尺禪がずり落ちてしまひ、それをまるめて閻魔さんの胴中へしまつて又遊び続けたらしい。大王さまの両手は折損し何処かへ失はれてしまひ、石の地

蔵像とこわされた一片が何様とも判らないままあるに過ぎなかった。半紙を横長にして左右に「め」の字を並べて書き何もい壇の上で張ってあるのを見て不思議に思ったが、これは淡島さんに願をかけたのだとは後になって聞いた。随って我々は「堂」と云へば、地蔵さんと閻魔さんだけだと思つてた。

大正十年頃になって、部落では雨戸を整備してたゞみを敷き、「会場」と名付けて集会場とした。これを機会に地蔵堂内は子供の遊び場ではなくなった。大正十二年の関東大震災で、此のかが草の堂は倒壊してしまつた。大正十三年七月、元の古材と部落民の寄附金四百四十円、それに努力奉仕とに依り、トタン屋根として元より少々大きく復興された。昭和の初め頃何処からか地蔵さんのお札用の版木が出て来た。それからこれに墨をぬり、何回かお札を刷つた。

三、地蔵堂の供養

昭和十年頃、部落内の老人が相次いで倒れた。これは閻魔さんの手が無いのをそのままにしてるからだ。等と云う占りも出たりして部落内が動揺した。これをきっかけに各像を復元修理彩色して、御詠歌をやる

等特別大供養をした。

供養は以前から、一月二十三日、七月二十七日、それに春秋の彼岸を加へて年四回宛行はれて来た。「お地蔵さんの番」は、毎年二戸一組で、各家(本岸久保の十六戸)から米を集めて紅白の握り飯と煮メを作つた。午後は久保中の老人や婦人が集まつて念仏を唱え子供等は握り飯を貰ひに集まつた。七月二十七日には時に芝居等の余興を催す事もあり、二十七日、八日にはお祭りの道具の土用干で行い、各家庭では「いきみたま」の行事が行はれた。長雨で困る時には誰かが一人、地蔵さんには尻を向けるが外向になつて「天道念仏」を始めると、やがて一人二人と集まつて来て堂一ぱいになり、雨が止む迄幾日でも朝から晩迄その念仏が続けられた。

地蔵堂の供養念仏とは別に、此の十六戸では「月なみのお念仏」と云つて、毎月順次に各家を廻つて念仏が行はれた。尚支那那事変が始まつてから防空演習や防火訓練等もこの前で行はれた。大東亜戦争が漸く苛烈となつた頃には此の堂に、横浜市元町国民学校の児童が疎開して来た。

四、公民館に生れ変わった

昔からの農家十六戸だけの頃は、子供が池に落ちるのは「親がよく注意しておかないかど」損の木かおら落ちて頭にこぶを作つた子供は、「いたづら者だからだ」で済んだが、やがてそんな時代は去つた。大正十一年五月十五日、下曾我駅が設置されると駅に一番近い「岸の村」は急激に膨張した。生活様式と習慣とが著しく變つて来た。特に戦後に於て然りだ。やがて槇の木に上る事は嚴重に禁止され、池には金網が張られて水泳は不可能となり、更に最近ではコンクリートの蓋が作られた。地蔵堂に近い十六戸を中心の久保に守られて来た地蔵さんや月なみの念仏も方向変換の時期が来た。

地蔵堂

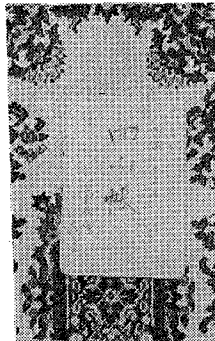
昭和三十年頃、部落の老婦人連中が話合つて、月なみの念仏と地蔵さんの念仏とを一しょにして、二戸一組毎月交代で二十三日に地蔵堂で行う事になった。此の頃にはもう握り飯ぐらい食いたく集まつて来る子供なぞ居なくなつた。又土用干しやいきみたまの行事等も、日曜でなくては都合悪くなり、二七日、八日の意味も薄らいで来た。そして部落の集会場であつた地蔵堂は、建物の老朽化と時代の要求とによつて、昭和四十四年三月、新たな公民館に建て替へられ、その一室に右の四像は祭られた。二戸の右の四像は祭られた。念仏は従前通りであり、当日は近隣の部落からの参詣者も数多い。

要である。尤も戦争中を外で過した私には、疎開學童の事は、私自身の目で確かめ得られなかつた事ではあるが。

扱、曾我岸自治会保存書類の中に、和紙を綴じて表紙に「明治二十五年、回向帳、曾我岸地蔵堂」と毛筆で書いた一冊を見出した。私は子供の頃から「お地蔵さんのお開帳」が行はれた事や、その時修理彩色したのが塗師は前のよい塗料をはぎとり、悪いものを使つたから儲けられちゃつた事等聞き知つた。だが、それは何時頃の事か誰も知らなかつた。

相当年輩者でも「さあ、何年位前の事だつたのか」と全く判らなかつた。人間は案外忘れっぽいものだが此の回向帳に依つて私は明治二十五年と判断した。私は此の回向帳を持って明治二十五年部落の生れで八十六才の乙部政次郎さんを尋ねた。乙部さんも「お地蔵さんのお開帳が明治二十五年だつた事は始めて知つた。そうだが色々話をした次の様な事を知つた。此のお開帳には、行事や余興は色々あつた様だ。乙部さんの生れた年なの縁でそのそれは判らないが山岸に柳川佐五右エ門さんと云う人が居つた当時、曾我岸は本岸十六戸と、上曾我部落の中に入つて山岸久保十一戸計二十七戸だつた。(昭和三十三年七月、山岸久保は曾我岸部落から分離してしまつた)此の人は「サゴエンヤン」と云つて私も子供の頃から何回となく聞いた。乙部さんも「サゴエンヤン」と発音された器用な人で、此のお開帳の時に地蔵堂の前に毛谷村六助の人形を作られた。片手に煙草入れ、片手にきせるを持ち、肩がキツとして、一寸首をかしげた様は実に立派だつたと云う事である。

七月二十七日の夏祭りは以前は八月二十三日だつた。当時は養蚕を沢山やり、丁度一番忙しい時になり、又暑い盛りで、昔の事だから伝染病等も流行し易かつた。七月末は田の草取りも終りほし田で一寸ホツとする頃ではあり、各地の若者も土用ほしをして二十七日、八日が休みだと云うので変更された。その年代は、私が子供で握り飯を貰ひに行つた頃、板橋の地蔵さんへお参りに行つて来たと言ふ人があつたので、大正の初期以後と判断される。



代の要求とによつて、昭和四十四年三月、新たな公民館に建て替へられ、その一室に右の四像は祭られた。

六、回向帳  
回向帳に表はれてる村及

び部落名は四十余に及び、遠くは松田町神山、中村藤沢、中村田中、雑色村、赤田村、古栗田村、風祭等がある。面白いのは前羽根村と云うのが数ヶ所ある。次に字名が前川とあるから前羽村である事は確実だが、

当時は前羽根村と云ったの

だろうか。私の知る人も若干はあり、話に聞いたよけの名前は大分ある。恐らく右に掲げた区域内の年輩の方々の中には、これはうちの祖父だ。おや隣の親爺の名が書いてあるぞ等と云はれる人々が多々ある事だろう。私の祖父の名前の上には金拾銭と書いてある。毛

単位が通用し、又部落内でこれより少額のものもあるから最下位ではないが、私の家は丁度どん底に落ちてた頃である。祖父の実家は国府津で、その兄の名前の上には金四拾銭と書かれてる。家は金四拾銭と書かれてる。家の部落の事だから奮発したのではないか。此の寄附者は、村中、久保中、若者中等四十五団体、個人名は百六十八、総金額五拾貳円拾七銭七厘と白米七升である。他に品物は部落内の者

だが一団体と十四名で、塔婆木、お供へもち、級帳、大小提灯、御盛物、紫幕等

供物や大道具的なものである。久野村欠、上と酒匂村で三ヶ寺三名の氏名を書いた紙を折り、袋になった紙面の中に入れたのがあるが、これは何の爲めなのか考えられない。当にしていた寄附が貰えなかったのではないかとと思はれる。

七、俳句の大額

堂内には何十句もの俳句を、いとも美しく筆書きされた一枚板の大額が掲げてあった。最後に「明治二十五年辰之立秋」と書いてある。これは前記乙部さんの話に依れば、上曾我舞戸の鳥居惣兵衛さんが書かれたものだと言ふ。やはり「お地蔵さんのお開帳」に關しての行事の一つだったと考えられ、「お開帳」はいよいよ明治二十五年だったとの確信を得た。公民館に建て替への際、これは捨てないでとって置く様に云ったに、何処へやったか誰も知って居る者がなく、大変残念に思つてた。偶々山車小屋へ行ったら、ほこりを冠つて奥の方にあったのでホッとした。そしてすぐ新しい公民館に生れ変わった一室、地蔵尊前に掲げた。

おわりに  
大きな事件や有名な行事は郷土の歴史に残るが、部落の片すみに起きた日常茶飯事はすぐ忘れ去られてしまふ。然し後世になると当時の社会民情を知る上に於て案外重要な役割を果たすものではないか。私共が父祖から聞き、又目で見て来た事柄はどんな小さい事でも、ありふれた事でも、事

### 人類不滅の魂(山行編)(1)

柏木 次郎

私達が住む日本列島は九分通り茶色に塗られた山岳地である。従つて私達の祖先は遠く古えより山岳信仰の対象として又日常生活の場として今日の私達に伝えられて来ている。

山は自然の城壁であるとともに自分達の生活の場を他国の部属の侵入から防いで来た。本来人間は野生的、原始的、冒険の本能から海に陸に活躍し今日日本列島の改造して来たし又開拓して来たことは郷土史の史実にあり又伝えられて来

た。吾が郷土に於ける土地は三方が山に囲まれ一方は海に面している。その中で山は山なりの文化の発達と文化圏の確立、そして海には海なりの文化の発達と文化圏の確立である。従つて今

ようか。古来の山行者は獵師や修験者、炭焼き等である。日本は山で生れ育つた民話や生活の場も多く、今日の人口増加に伴ない平地から高地にかけて生活するに至つた。封建時代は特に領外へ移住することは禁止されていたのでその活路を山に求める理由はそこにあった。

信仰のために山に登つた修験者も自然の敵い中で心の修行をして悟を開く、又死後の極楽往生願う心から再度山に登ることがある。山と言へば庭園の築山など盆景造りも今日では盛んになって来ている。そして宗教の根本は山にあり特に神道や仏教では山を信仰の場として仰ぎ山岳信仰の隆盛を今日に見るのである。此れ等は先達に依つて開発され今日の富士山や八ヶ岳も例外ではありません。山国である日本は四季を通じて変化を見ることが出来る。今日の山行者の大半は安易に山に登り自然をあまり見ることが多くなつて来ている。山に登る以上は信念と根柢を持つて実行してもらひ。先達者は未踏の山を決してあまく見なかつた私達山行者は先達者の業を少しでも参考に致したく思つて居る。

自然は私達人類の力で解決の出来ないもの一つである以上山行するには十分研究して見て安全確認の上で山行したいものである。山行して先達者の歴史を知ることも山の思い出ではないでしようか、今日の山は体力トレーニングが主である、郷土の文化が生れるも育つも自然の恩恵ではなからうか。

日本人は山との結び付きは古いものであるから山に對しては自信があるのではないでしようか、四季を通じて自然に接して毎日の生活の営みを得ている、日本の山で未踏の山はないから古来より登りつくされて来ているのが郷土の山々ではないでしようか。

私も初心者ながら富士山や丹沢山系、箱根山系を一步一歩登りつくし山の歴史や山と人間關係を知るため休みの日などは出かけている。より安全により楽に登る技術の研究や開発を考えながら又万全を期して山にいでむ。

は丹沢に箱根に見ることが出来よう又観光の場としても今は盛なり。四季を通じて山の景色は変化にとんでる。日本の集落は盆地に多く何々盆地といった言葉を聞くことがあると思う。

衣食住は山で生れ育った物が多く、山を別にしたこととは考えられず古今の歴史が物語っているのは確かである。野生的、原始的、冒險的本能に依って人々は山に入り生活の営みをして来たのは今日に見ることが出来る。又人々は平地から高地に移り住む時代にもなってきた、山への愛着心は今後盛んになって来ることは確実である、それだけに山の歴史を大切に又山を大切にしたいものである。

山行  
1、五十年七月 富士山初めて登頂  
2、五十年十月 天子岳山系登頂  
3、五十一年八月 風雨をについて富士山登頂  
4、五十三年一月 積雪の矢倉岳、金時山縦走  
5、五十三年三月 塔の峯明星、明神、金時を短時間縦走  
6、五十三年四月 丹沢山系登頂(短時間縦走)  
7、五十三年五月丹沢山系予定

8、五十三年五月 富士山(積雪行軍)予定  
9、五十三年七月 富士山(夏山)

# 昭和五十一年度事業報告

山行に対して歴史や技術にアドバイス者の協力を願います(取材は歴史、写真、地理他)

連絡小田原市蓮正寺四七〇 榊シクタン内  
互助会 山の会  
木次郎宛

第一回大森氏史跡めぐり  
会費二、五〇〇円、バス二台、講師中野敬次郎先生

一、理事の増員に關して鈴木久子、和田二郎兩氏を理事として、すいせんする。

七月九日 午後一時三十分より定例理事会開く。  
一、七月行事の講演会は先生の都合により八月六日とする。

一、会報に關する件。「小田原史談」の発行が遅れているので促進策を決める。

八月六日 午後一時、郷土文化館に於て「助郷に關して」宇佐美先生の講演会を開く。

△二十七日 午後一時、郷土文化館で定例理事会を開く。

△九月十日 午後一時三十分より中央公民館に於て定例理事会を開く。

△十月五日、六日 水戸、袋田方面一泊史跡めぐり講師中野敬次郎先生。

二月十日 午後一時三十分中央公民館にて定例理事会を開く。  
一、第二回大森氏の史跡めぐりについて。  
二、三浦七福神めぐりの報告。

三月五日 第二回大森氏史跡めぐり。  
会費二千五百円、バス一台、講師中野敬次郎先生  
△十一日 午後一時三十分中央公民館にて定例理事会。

一、史跡めぐり報告。  
一、役員の任期なる故すいすん委員を選び(委員長松本孝作氏)新役員を左の通り選出し四月の定期総会に於て承認を受ける事とする。

長岡中野敬次郎先生副会長  
平岡幸雄、香川政治、杉崎正五、鈴木平八

事務局長 相沢栄一  
監事 富田千秋、岩田栄

會計 曾我保夫  
史談会会報についての報告をします。

予定の年六回(隔月)が発行出来なかつた事をお詫び致します。理事会で種々討議致しまして、どうか発行月は狂いましたが六回本年度は充実した内容で盛込んで皆様方の御期待

そいいたいと思つて居ります併せて、会員皆様方の民話俳句、和歌其の他、身の廻りの近況等の御投稿をお待ちして居ります。

小田原史談会  
良書のお知らせ  
既に会員の皆さん方御存知の方が多と思いますが小田原文庫刊行会(世話人 杉山博先生)より  
小田原合戦  
(相田二郎著)  
小田原史跡めぐり  
(立木望隆著)  
石橋山合戦前後  
(中野敬次郎著)  
北条早雲 (杉山博著)  
小田原歳時記・小田原昔話 (田代龜雄著)  
小田原の刀剣  
(横田孝雄著)  
近世小田原ものがたり  
(中野敬次郎著)  
が名著出版社から八小堂書店に依託販売されて居ります。続刊として「北原白秋と私」、「小田原文学散歩」等々が予定されて居ります。当小田原史談会も推せん団体の一つともなつて居ります。会員諸兄の御愛読をお進め致します。

